

新川和江の植物表現をめぐる 翻訳方法論

——文化的差異を意識した「春」の翻訳の試み——

藤本まどか

春

わたしはもう悲しむまい
あけびも、どうだんも
藤も 楓も 八手も 楓の木も
みんな忘れずに芽をふき出した朝
親しいものがいちどきに訪れた
輝かしい恵みの春だもの

それにもまして これはどうであらう
寒い冬の日に伐りたはされて
庭の隅に横になつたまゝの
銀杏の幹から 枝から
こぼれる様に芽をふいた此の青いものは！

ああ ひとよ
かの樹木らの偉大なる生存力を讃へよう
すべてが息をふきかえた恵みの春に涙を流さう
過ぎ去つた陰惨な冬の日の苦しみは
もう言ふまい
暗い夜はすでにあけ
今や地上は明るい輝きに満ちた春の朝だ

雨上りの空気のやうに
しつとりと重量のある大気の中で

みどりのかげに胸をたかならせ 心ふるわせ
ひとよ
わたしはめんどりの様な理屈ぬきの情熱で
希望と親愛の卵を抱きしめる

(新川和江『睡り椅子』プレイアド、1953)

1 はじめに

新川和江は、日常の中から人間の普遍的な本質を見出し、言語化する詩人である。柔軟性に富み、「全世界」を意識した壮大なスケールで詠まれる境界無き世界観は、新川独自の植物観により成り立っている。その植物表現は、植物を人間と同列、ひいては人間以上とするものである。植物が「共存する存在」として、非常に重要な役割を担っていることを戦争詩⁽¹⁾から読み取ることができる。

その最たるは『睡り椅子』⁽²⁾の「春」である。この詩は、新川の独自の植物観と戦争観が融合し、植物、動物、人、国、すべての境界を超越した平和を願うものである。世界のどこに向けて翻訳をしても、その心情と表現は理解を得られるものだろう。

また、それは、この詩が異文化間での文学交流を促進する重要な素材であると同時に、慎重な翻訳が求められる対象でもあることを意味する。

本論では、新川の「春」の植物表現に焦点を当て、その翻訳を通じて文化的相互理解の可能性を探求する。それは、翻訳という行為が、文学作品の普遍性を異文化圏の読者に伝える際に果たす役割を考察することでもある。

2 翻訳の意義

翻訳は単に「特定の文学を異なる言語に訳す」という行為を超え、多面的な価値を持つ。その中でも特に重要なのが「文学交流」としての役割である。「文学交流」は『文学交流入門』⁽³⁾において、「異文化に立脚した文学相互の〈双方向〉的交流」と定義されている。このように、「文学交流」は異文化間の相互理解を深め、人類共通の課題を考察する枠組みとしての役割を担っている。そして翻訳は、この「文学交流」を促進する主要な手段である。

本論ではこの定義を用いて、翻訳が「文学交流」においてどのような役割を担っているのかを検討し、翻訳の実践に向けての基軸を定めた。

翻訳の基本的な役割は言語の媒介であるが、これは単なる作品の伝達ではない。原作の言語と文化（国内）とその他の言語と文化（海外）における交流により、翻訳は異文化間の相互理解を深める橋渡しとして位置づけることができる。翻訳を通じて他文化圏の文学が新たな読者層に届くことで、文学的対話が促進されるのである。

また、読者の用いる言語と、同言語を用いた作品を読む際に、作者と読者間で行われる一種の文学交流も、翻訳においては非常に重要な役割を果たしている。

翻訳に際した詩の分析は、言葉一つ一つへの注意力を格段に上げ、それらの表現力の細部まで探究することになる。さらには、翻訳対象作品にとどまることなく、その作者の作品を網羅することで「作者にとっての作品を理解すること」が可能になるのである。この文学交流の重要性は、翻訳作品の分析を行う書籍や論文が多く存在することからも理解できるだろう。

翻訳者の視点を介した翻訳作品は、作品の解釈や価値が新たに構築されている。「主観的読解のみで理解する文学作品」で終わらず、原作に内在する文化的文脈や象徴性を再解釈し、「翻訳者」という他者が持つ新たな視点からも作品理解を深めることを可能にするのである。これは翻訳を基とした文学の循環的な過程により、原作の文化圏では透明化していた文学作品の要素や価値を浮かび上がらせるものである。

一方で、「文学交流」を意識した翻訳には、「確立された文化」をどの程度まで翻訳によって変容させるかという課題が伴う。特に、日本文学における翻訳では、「隙のない文化」の確立が行われているように思われる。オリエンタリズム的な日本の伝統の強調によって日本文学が独創性をもつ一方で、作り上げられた世界は非常に閉鎖的なものである。

独自の世界観に固執し、内向的になりすぎることは、異文学交流を行おうとする他文化圏の読者に文化の境界線を強く意識させ、交流の拒否になりかねない。日本の歴史や文化のみが日本文学を形成しているわけではなく、培われた思想、表現もまた、日本文学を構成する一部である。

翻訳によって表層的な「日本らしさ」が損なわれることがあっても、翻訳作品を通じて日本文学の深層的な価値や本質に触れた読者が「日本」に対して新たな関心を抱くことができれば、異文学交流は一步先へと進む、新たな可能性へとつながるだろう。

以上のことから、翻訳は「文学交流」において欠かせない役割を果たしている。異なる言語や文化を媒介することで、原作の内容や象徴的意味を他文化圏に伝えながら、文化的文脈や歴史的背景を適切に反映させるだけでなく、翻訳を通して作品を読むことで、逆算的作品理解と新たに付与された価値を認識することができるのである。翻訳は単なる言語の置き換えを超えて、「文学交流」において重要な役割を担っているのである。

3 翻訳のプロセス

前節で述べたような翻訳について考える際、植物名は翻訳の際に大きな困難をもたらすものの一つにあたるだろう。特に各国における文化に浸透した植物であ

るならば、なおのことである。以下『文学交流入門』⁽⁴⁾のローレン・ウォーラー「翻訳の理論」からの引用である。

翻訳はたいてい「等価」という概念に基づいています。しかし、「りんご」とappleは等価であると言っても、必ずしも簡単な問題ではありません。有名な例として、ドナルド・キーンDonald Keene (1922-2019) が1956年に『斜陽』を英訳した際、太宰治が描いた「白い足袋」をwhite gloves (白い手袋) と言い換えたことが挙げられます。ある意味で、この意識は直訳より意味(心)を英語圏の読者に伝えています。というのは、その足袋は登場人物の人格を表す比喩だからです。

このように、言葉の直訳だけが翻訳ではなく、どの基準をもって「等価」を選択し、翻訳に用いるかが重要である。特に等価の選択が困難なものの一つに本節の冒頭で挙げた植物名がある。植物における等価を検討するには、その植物名の外部的な面と内部的な面について分析する必要がある。

外部的な面は認識のために用いられる名前であるが、内部的な面はその名前が「特定」の場合にのみに意味を持ち、「特定」に当てはまらない人にとっては意味を成さない、もしくは直感的に理解するに至らないものである。植物名の内部的な面は文化、環境、歴史、感情などで構成されており、それぞれの文化圏の無意識下での共通認識によって存在する。これらは混ざり合って存在しているため、明確に分離させることは不可能である。しかし、翻訳においては、外部的な面が重要視されて詠まれている植物名か、内部的な面が重要視されて詠まれている植物名かを判別し、等価を選択する必要がある。

このことを踏まえて、より詳細に植物名の翻訳方法を検討する。ウォーラー「翻訳の理論」⁽⁵⁾によると翻訳方法は①借用、②語義借用、③直訳、④転位、⑤調整、⑥対応、⑦適合の7つに分けられる。

普通名詞の翻訳で用いられるのは主に①借用、③直訳、⑥対応、⑦適合である。①借用、②語義借用、③直訳は直訳的で、植物名の外部的な面の重要視であり、⑥対応、⑦適合は植物名の内部的な面の重要視である。⑥対応は主に諺、イディオムで用いられるため⑦対応が普通名詞の間接的翻訳の主な方法である。

しかし、これらの翻訳方法に当てはめる前に、詩の中での植物の「前提」と「象徴性」を考察する必要がある。例えば、前提が「身近な植物」、象徴性は「春を告げる花」の場合を挙げたい。それは、日本では桜、中国では梅、ドイツではクロッカス、オーストラリアではミモザ(アカシア)などである。前提として挙げられる植物も、それぞれの植物がもつ象徴性も、文化圏によって全く異なるのである。

この「前提」には、社会的概念による前提と個人的概念による前の2つがある。社会的概念は集団への影響が考慮され、定義された社会や文化のなかで共有される価値観、思考を指す。

一方で、個人的概念は、個人の経験や主観に基づく価値観や思考である。新川の植物表現で考察すると明瞭になるだろう。新川の植物表現の前提にある「日常(身近な植物)」は、個人的概念に基づくものであり、社会的概念の影響はあるものの、そこに主軸は置かれていない。

双方、詩人の思考を形作る重要な要素ではあるが、認識の差が生まれやすく、特に明確に捉えることが困難なのは、個人的概念である。社会的概念はその時代のことを調査することである一定までは理解することができる。しかし、個人的概念は、1つの作品を読んだだけでは、作者のそれを明確に理解することが困難であることは言うまでもない。個人的概念の正確性を高めるためには、作者の作品を網羅する必要があるだろう。

本論では新川の全作品を分析し、自然表現の特色を明瞭化した。これは作品と作者理解を起点としているために行われた分析である。翻訳を第一目標とした場合には、この過程は大抵省略されるか、縮小される。とすると、個人的概念は社会的概念の影に隠される、もしくは認識されないものとされるのである。

すなわち、個人的概念に基づく前提は、翻訳において「見落とされやすい前提」(明示的に認識されにくい「潜在的前提」)と言い換えることができる。

次に、「象徴」についてである。前述の「前提」と同様に、社会的概念と個人的概念による象徴性の2つがある。特に視覚的に認識しやすいのは、植物の社会的象徴性である。銀杏が学校のシンボルマーク、銀杏文などとして広く用いられていることが例に挙げられる。

一方で個人的象徴性は、個人が生きてきた環境や経験によって構成されるため、自己を表現するための独自の手段ともなりうる。個人的象徴は個人的概念と比較すれば作品に表出しやすいものであるが、やはりそれを明確に認識するには多くの情報収集と詳細な分析が必要である。

そのように労力がかかるとはいえ、作品と作家の深層を可能な限り明確にし、個人的概念に基づく前提と個人的象徴性を踏まえることにより、より重層的な作品理解と翻訳が可能となる。

それゆえ、筆者は植物名の前述した7つの翻訳方法に、翻訳を行う対象文化圏(国)を想定した、「⑧前提と象徴性を踏まえた植物名の翻訳」を加え、その中から植物名の分類と組み合わせて6種類の翻訳方法を定義したい。

- a) A-① b) A-③ c) B-① d) B-③ e) B-⑦ f) B-⑧

- A 植物名の外部的な面の重要視
- B 植物名の内部的な面の重要視

- ①借用：植物の名前を重要視した翻訳（植物名をそのまま英語・ローマ字表記に：萩→Hagi）
- ③直訳：植物の名前を重要視した翻訳（植物名を英訳：薔薇→rose）
- ⑦対応：詠まれている植物から読み取ることができる感情や文化的位置付けを重要視した翻訳（似た植物に置き換える翻訳）
- ⑧前提と象徴性を踏まえた植物名の翻訳

定義した翻訳方法の内、どの翻訳を行うかを検討するに先立ち、新川の詩の既存の翻訳を分析し、翻訳作品の等価を検証したい。

4 翻訳作品のテーマ傾向と植物の翻訳

NOT A METAPHOR⁽⁶⁾ で翻訳されている新川の詩で詠まれている植物が、上記の6つの中のどの方法を用いて翻訳されているかを、*NOT A METAPHOR* から具体例を挙げてみていく。

同詩集の中から植物を抽出し、原文と翻訳版を比較したところ、翻訳で最も多いのがb) A-③の、外部的な面の重要視して詠まれた植物名を直訳したものであった。これは、特別な文化的背景が影響を及ぼしていない植物であるため、「水蜜桃」をThe peachというように、直訳を行うことによる大きな問題はないだろう。

残る詩はd) B-③であり、これは植物の翻訳においての内部的な面を重視して詠まれている植物名を、直訳したものである。例えば、「春寒」⁽⁷⁾で詠まれている「桃の花」は、雛祭りでの文化的意義から想起されるイメージが内包され、重要な要素となっている。しかし、peach blossomsという翻訳（直訳）では、桃の花における象徴性を認識することは困難である。詩において重要な要素であるはずの象徴性が、翻訳過程において消失されているのである。

このような詩中の植物表現の傾向は、詩が持つ象徴性を強調すると同時に、翻訳の際にそれぞれの植物が異なる文化的背景を持つ読者にどのように受容されるかを左右する重要な要素として機能しているといえる。

さらに、新川和江の植物表現を踏まえて*NOT A METAPHOR*に収刊された詩を検討すると、同詩集に登場する植物名には、日本固有の植物やその文化的・歴史的象徴性が際立つものは少なく、むしろ輸入植物のように日本文化に定着してからの期間が比較的短い植物が多く選ばれていることが明らかである。

具体的には、普通名詞として詠まれた植物（水蜜桃、れんげ、薔薇、ヤナギな

ど)は87あり、これらは外部的特徴が強調される傾向にある。

一方で、植物そのものを直接示す普通名詞を用いずに抽象的な表現として詠まれた植物(青草、木の葉、木など)は94にのぼる。このことから、全体の半数以上が抽象的な表現を用いた植物であることが確認できる。

さらに、詩中で普通名詞として詠まれている植物のうち、異文化圏から輸入され、日本文化に定着していない植物が30含まれており、全体の34.5%を占めている。このような植物は文化的背景における印象の差異が少なく、翻訳が比較的容易であると考えられる。具体的には、薔薇やりんご、葡萄などが該当し、それらは多文化的な文脈においても認知度が高く、象徴性の差が最小限である。

しかし、新川和江の全詩集に登場する植物名786の内訳を分析すると、日本国内で一般的であった植物が612(79.5%)を占める一方で、異文化圏からの輸入植物は174(20.5%)に留まっている(重複を含む)。この分析結果から、*NOT A METAPHOR*に収刊された詩では、輸入植物が詠まれている詩が意図的に選ばれているといえる。これは、異文化圏の読者が受容しやすい内容を意識したものと考えられる。

新川和江の植物表現における重要な象徴性は、*NOT A METAPHOR*の翻訳方法において、十分に表現されているとは言い難い。同翻訳では、「前提」や「象徴性」といった詩的要素の重視ではなく、直訳的なアプローチが採用される傾向にあり、その結果、詩が本来持つ象徴的意義や文化的背景が埋もれている。

本論で筆者が翻訳を試みる「春」においては、別稿で論じた⁽⁸⁾ように、「春」に登場する植物表現には、以下のような象徴性が見られる。(1) あけび/藤—柔軟性、(2) どうだん/楓—日本的な植物、(3) 銀杏—聖性、(4) 八手—呪力と戦争、(5) 榎の木—生命力と安心感。

このことから同詩中の植物表現はその象徴的意義や文化的背景を考慮する必要があり、B:植物名の内部的側面を重視した翻訳が求められるのである。以上のことを踏まえると、「春」ひいては新川の植物表現を翻訳する上で最も有効な翻訳の形はe)もしくはf)である。

5 翻訳対象文化圏のオーストラリア

本論では翻訳対象とする文化圏として、オーストラリアを選択した。この選択はオーストラリア全体の自然観と戦争史によるものである。

オーストラリアは特徴的な植物や生態系を有し、独自の文化が形成されている。その自然の豊かさと共存の思想は、同国がひとつの大陸として地理的・文化的独自性を持つことに由来し、その自然との共存を人間が破壊してはならないという強い意志があるといえるだろう⁽⁹⁾。この背景のもと、人間による自然の破壊を防ぎ、共存を追求する強い意志が根付いている点は、新川の植物観と共感するも

のである。

また、オーストラリアの戦争史と日本の歴史的関係も非常に重要である。第二次世界大戦中、1942年2月から翌1943年11月にかけて、オーストラリア本土や周辺地域の空域、沿岸輸送ラインにおける船舶が日本軍の攻撃対象となった。

特に、1942年2月19日のダーウィン空襲は、日本海軍によるオーストラリア本土への初の大規模空襲であり、オーストラリア史上最大規模の外国勢力による攻撃であった。

このような戦争の記憶は、現在の日豪間の友好関係の基盤を考える上でも忘れてはならない歴史的事実である。親日家が増加し、日豪間の交流が深まる現在だからこそ、これらの歴史的背景を踏まえた文学的・文化的対話の重要性が際立つ。

詩「春」は、日本人・新川が日本で詠んだ詩であるが、その普遍的な自然観や平和への思いから、国境を超えて翻訳可能な作品であり、自然や人間を超越する理念を象徴する。翻訳を通じて多文化的な共感を得る力を持つといえる。特に、「春」をオーストラリアを対象に翻訳する試みは、自然や戦争、平和といったテーマを基盤にした文学的交流の可能性を広げ、歴史的対話と他者理解を深める重要な契機となるであろう。

6 オーストラリアの植物と翻訳の実践

文化的差異を意識した翻訳を行うにあたり、オーストラリアの文化調査を行う必要がある。「春」で詠まれている植物は「日常」であり、身近な植物であることが絶対条件であるため、オーストラリア在住の知人30人に調査の協力を仰ぎ、身近にある植物の名前を挙げてもらった⁽¹⁰⁾。

アンケートの結果、多くの人に挙げられた植物こそが一般的に身近な植物であるとみなせる。それぞれの植物の生態と「身近」であること以外の文化的特徴も踏まえた上でできるだけ多くの票が入っている植物を選択した。

対応する植物として、以下の選定が挙げられる：(1) あけび—ソリア、(2) 藤—ハーデンベルギア、(3) どうだん—ボトルブラシ、(4) 楓—ユーカリ、(5) 楓の木—バンクシア、(6) 銀杏—アカシア、(7) 八手—ローズマリー。

(1) あけび—ソリア

「春」において、蔓性の植物は新しい時代のはじまりを象徴する植物であり、新川にとっての「新しい時代のはじまり」は「多元的な考え」のもとに成り立っている。それは「柔軟性」と言い換えることができる。ソリアは繁殖力が非常に強い蔓性の常緑低木であり、あけびに対応する植物とした。オーストラリアのBushに広く自生しており、その生命力とつる性があけびと共通する。オーストラリアの柔軟性を象徴する植物としてあけびに類似性があるだろう。



ソリア



ハーデンベルギア

(2) 藤—ハーデンベルギア

藤も(1)と同様、柔軟性を象徴するマメ科の蔓性の植物である。ハーデンベルギアは各葉腋から花穂を伸ばして、やや下垂する穂のような花序をつける。紫の花が咲き、つるは旺盛に伸びて広がる。枝は徐々に木質化して硬くなる。暑さ寒さに強く、繁殖力の強い植物であり、日本での藤と同様の印象を抱かせる植物といえる。

(3) どうだん—ボトルブラシ

どうだんは日本的な植物であり、対応する植物としてはオーストラリア的である必要がある。オーストラリアを象徴する植物の一つであるボトルブラシは、赤い花が木全体を覆うように咲き、その美しさから庭木として広く利用される点や、その国の独自の植物である点でどうだんと共通する特徴を持つ。



ボトルブラシ



ユーカリ

(4) 楓—ユーカリ

楓は植物の生態と文化的側面から極めて日本的である。対応する植物はオーストラリアの生態、文化に密接に関わるものが適している。ユーカリはオーストラリアに分布し、国内分布で確認されているのは850種あまりである。成長が早く根を深く伸ばして水を吸収する能力を持ち、先住民族、アボリジニはユーカリの葉を、傷を癒すために用いていた。

現在も医療や生態系の観点からも重要な役割を果たし、自生だけでなく、街路

樹や庭木、屋敷林として多く植えられている。ユーカリを食べる動物や花の蜜を吸う鳥類が集まることから、オーストラリアの象徴的な植物の一つである。以上のことから、楓に対応する植物としてユーカリが適当であろう。

(5) 楓の木—バンクシア

楓の木は戦火や軍需造船供木運動を生き延び、どっしりと根を張る様から、生命力と安心感を象徴している。バンクシアはオーストラリアの厳しい環境、特に山火事などの自然災害に耐える性質がある。これは、苦境を乗り越える強い生命力の象徴であり、Matt Kilbyの*Blazing banksia* ⁽¹¹⁾ のように、オーストラリアの戦争芸術作品や文学でも、象徴性を持って描かれている。

また、バンクシアは潮風や乾燥に強く、堂々とした存在感を持つ大木である。大木に、鳥やポッサムなどの小型動物をはじめとする多くの生き物が集い、堂々とした存在感を感じるのとは新川の楓の木に対する印象と近似している。



バンクシア



ワトル

(6) 銀杏—ワトル（アカシア）

アカシアはオーストラリアの国花であり、1350種のうち、1000種がオーストラリアに分布する。根を深く伸ばすため、水が少ない場所にも自生し、黄色い花を咲かせる。現地ではワトルと呼ばれ、国のシンボルになっており、春の訪れを告げる植物である。また、アカシアは古代イスラエル人にシッタと呼ばれる聖木であり、樹木は硬く、腐ったり虫に食われたりしないため、聖書においては「不朽不滅、永遠」を象徴する。

銀杏も神社や寺院に植えられることが多い木であり、精神面での象徴性を持ち合わせている。そのため、アカシアと銀杏はその強靱さや精神的象徴性に共通点を見出せるだろう。

(7) 八手—ローズマリー

オーストラリアには戦争追悼の際に赤いケシ（ポピー）やローズマリーを身に付けたり、捧げたりする慣習がある。以下Army ⁽¹²⁾ より引用である。

1919年のイギリスでは、英国王立在郷軍人会（旧英国在郷軍人会）⁽¹³⁾

が死者の名誉を高め、生きている人を救う象徴を求めた。追悼の象徴として赤いケシの花が採択され、受け入れられた。

赤いケシの花は、第一次世界大戦中のフランス北部とベルギーの荒廃した戦場に初めて咲いた花であり、オーストラリア人にとっても特別な意味を持っている。兵士たちの間の伝承では、ケシの花の鮮やかな赤色は地面を濡らした戦友の血によるものだとされている。⁽¹⁴⁾ (訳・注は藤本による)

ポピーを捧げる歴史は長く、現在もアンザックデー⁽¹⁵⁾やリメンバランスデー⁽¹⁶⁾に追悼として手向けられている。ポピーが象徴となったきっかけはジョン・マクレー⁽¹⁷⁾の詩*In Flanders Fields*である。特にリメンバランスデーはポピーデーとも呼ばれている。以下、*In Flanders Fields*の原文引用と筆者による訳である。

In Flanders Fields

In Flanders fields the poppies blow
Between the crosses, row on row,
That mark our place ; and in the sky
The larks, still bravely singing, fly
Scarce heard amid the guns below.
We are the Dead. Short days ago
We lived, felt dawn, saw sunset glow,
Loved and were loved, and now we lie
In Flanders fields.
Take up our quarrel with the foe :
To you from failing hands we throw
The torch ; be yours to hold it high.
If ye break faith with us who die
We shall not sleep, though poppies grow
In Flanders fields. ⁽¹⁸⁾

フランダーズの野に

フランダーズの野にヒナゲシが揺れる
墓地の十字架の列と列の間
私たちの場所の印
空にはまだひばりが勇敢に歌い飛んでいる

銃弾の中でほとんど聞こえなくとも。

私たちは死者。ほんの数日前まで

私たちは生きていて、夜明けを感じ、夕焼けの輝きを眺め、愛し愛されていて、それが今や横たわっている。

フランダースの野に。

敵との戦いを再開してくれ。⁽¹⁹⁾

私たちのくずれおちた手から松明を投げ渡そう

松明を高く掲げてほしい。

あなた方が死んだ私たちとの約束を破るなら

私たちは眠れないのだ。どれほどヒナゲシが咲こうと

フランダースの野に。(訳・注は藤本による)

次にローズマリーについて、AUSTRALIAN WAR MEMORIAL⁽²⁰⁾ から引用する。

古来より、このアロマハーブには記憶力を向上させる効能があると信じられてきた。おそらくこのため、ローズマリーは文学や民間伝承において忠誠と記憶の両方の象徴とされている。伝統的に、ローズマリーの小枝はアンザックデーや、時にはリメンバランスデーにも身に着けられ、それらは大抵レガシー⁽²¹⁾ やRSL (英国王立在郷軍人会) によって配られる。ローズマリーはガリポリ半島に自生しているのが発見されたため、オーストラリア人にとって特に重要である。⁽²²⁾ (訳・注は藤本による)

第一次世界大戦時に連合軍が上陸したガリポリ島中にローズマリーが咲き乱れていたことが、アンザックデーを象徴する花に選ばれた所以と言われている。そのため、アンザックデーに行進する退役軍人の胸元にもローズマリーの小枝が付けられている。ローズマリーもポピーほどではないものの、戦争をイメージさせる植物であると考えることができる。また、『ハーブのたのしみ』⁽²³⁾ によると、ローズマリーはヨーロッパでは、悪魔から守る神秘的な力を持つといわれていた。古代から薬用に用いられ、様々な作用を有する。現在も精油やハーブとして広く用いられている。

前述した通り、八手は戦争を想起させる植物であり、その点はこの2つの植物は非常に似ているといえる。生活の中で形を変えて用いられてきたという点、植物学的側面から考えると、より適当なのはローズマリーである。そのため、本論では八手をローズマリーに置き換えて翻訳を行いたい。



ローズマリー

以上の植物に含まれる社会的象徴性を踏まえて、戦争詩としての「春」の翻訳を試みた。

Spring

I am done grieving
Sollya, Bottlebrush,
Purple coral pea, Eucalyptus, Rosemary, Banksia,
Everyone has not failed to sprout at dawn
The familiar returning to us at once
It is the Spring of magnificence and blessing

More than that, what of this?
Be cut and fell down in the cold winter day
Laying on the ground in the corner of the garden
From the trunk, from the branches of the Wattle
How green, they sprouted the bursting buds!

Ah! Men
Let's admire those trees' greatness and power of existence
Let's shed tears for the merciful spring that everything came back to life
Suffer of Grisly winter days gone by
I won't say it again.
The dawn ends the dark night
Now, the earth shines brightly in the spring morning

Like the air after the rain

In the moist and heavy atmosphere
I'm exhilarated and my heart trembles in the shade of the flora
Men
Passion without logic like a hen
I hug the egg of hope and dearness

以上のように、「春」では個人的象徴性を持った「日常」に加え、それぞれの植物が持つ〈社会的象徴性〉も意識されていることが、翻訳過程を経て明確に表出された。この象徴性の顕在化は、「春」が単に終戦とこれからの希望を詠んだだけの詩ではなく、戦争詩としての本質的な価値があることを、さらに明確化したといえる。

対応関係の選定は植物の象徴性や文化的背景に基づき慎重に行うことで、翻訳を通じて文化的相互理解を深めるための新たな視点を提示する。この試みによって、翻訳が単なる言語の置き換えを超えて、異文化間の文学交流を促進し、逆算的作品理解と新たな価値を付与されるのである。

7 おわりに

新川和江の「春」は、独自の植物観と戦争観を融合させ、平和への思いを象徴的に表現した作品である。「前提」と「象徴性」を踏まえた植物表現をはじめとして、文学的価値の普遍性を有しており、国境を超えた世界平和的な詩として翻訳の可能性を持つ詩であろう。

「前提」と「象徴性」に対する理解を深化させることにより、作品理解が重層的で多角的なものとなる。これは「作者にとっての作品を理解すること」につながり、特に、植物表現の翻訳において非常に重要な要素となっている。

本論では「春」に詠まれる植物の象徴性や文化的背景を含め、オーストラリアの文化に浸透する植物からそれに対応する植物を選定した。これは、前提と象徴性を踏まえて対応させる翻訳の試みを通じて、異文化間の文学的対話の可能性を広げるものである。

文学作品は、作者の個人的な自己表現でありつつも、普遍的に人間の本質を映し出すものである。この本質は、文学という一つの形を通じて可視化され、国や文化を超えて共有され得る。しかし、この可視化の過程は、必然的に各時代や文化の影響を受けるため、そこに「差異」が生じる。差異は、文化や思想、宗教といった要素によって形成される各コミュニティのアイデンティティの根幹をなすものであり、そのため極めて重要である一方で、完全理解が困難な要素でもある。

このような差異の存在は、自己と他者の間に横たわる空間的・時間的な隔たり

に由来するものであり、いかに近い存在であっても、それを完全に排除することは不可能である。しかしながら、この隔たりを認識しつつ、他者の生きる世界を理解することを可能にする手段の一つとして文学が挙げられる。文学を通じて、差異に触れ、そこに潜む本質を見出すことで、他者への理解が深まり「共感」が生まれる。この共感の生成こそが、読者に人間の本质が共有されるものであることを再認識させるのである。文学は、差異と共感を媒介に、人間の普遍性を再確認させる力を有し、翻訳は文学の持つ「差異の認識」と「共感」という力を拡幅し、再構築することで作品に新たな価値を付与する。文学交流の可能性を広げ、歴史的対話と他者理解を深める重要な役割を担うものという認識は、翻訳をする上で非常に重要である。

今後は海外の詩人の植物表現を中心とした分析と比較、翻訳を試みることで、世界的視野で「植物」・「戦争」・「人間」の関係性について考えていきたい。

注

- (1) 本論での戦争詩は「戦争に関することを詠んだ詩」という意。
- (2) 新川和江『睡り椅子』ブレイアド、1953
- (3) 小松靖彦「はしがき—この本を読む人のために」『文学交流入門』、武蔵野書院、2023
- (4) ローレン・ウォーラー「翻訳の理論」『文学交流入門』、武蔵野書院、2023
- (5) ローレン・ウォーラー「翻訳の理論」『文学交流入門』、武蔵野書院、2023
- (6) Hiroaki Sato, *NOT A METAPHOR -POEMS OF KAZUE SHINKAWA*, P.S.A Press, 1999
- (7) 新川和江『夢のうちそと』花神社、1978
- (8) 藤本まどか「新川和江の植物表現——比喩の意味と戦争詩における役割——」『青山語文』第55号、青山学院大学日本文学会、2025
- (9) オーストラリアの入国、出国に際する検疫の厳しさが分かりやすい例である。
- (10) アンケート回答者は10代(6.5%) 20代(37%) 30代(6.5%) 40代(13.5%) 50代(30%) 60代(6.5%)、全員メルボルン在住者。アンケート内容は「身近にみられる植物を出来る限り挙げてください。」というもの。

結果(票数順): Acacia, Wattle tree (アカシア (ミモザ)) 30, Eucalyptus, Gumtree (ユーカリ) 30, Narrow-leaved, Paperbark, Tea tree (ティーツリー) 28, Jasminum (ジャスミン) 14, Bottlebrush (ブラシノキ (カリステモン)) 26, Banksia (バンクシア) 25, Hardenbergia, vine lilac, Purple coral pea (ハーデンベルギア) 20, Jacaranda tree (ジャカラнда) 13, Pink heath (ピンクヒース) 12, Sollya (ソリア) 10, Paper Cascade (ペーパーカスケード) 9, Lemen (レモン) 9, Pincushions, Leucospermum (ピンクッション) 7, Rosemary (ローズマリー) 6, Manuka (マ

- スカ（ギョリュウバイ） 5、Plane tree（プラタナス） 5、Agapanthus africanus（アガパンサス） 4、Sasanqua（サザンカ） 17、Violet（スミレ） 4
- (11) AUSTRALIAN WAR MEMORIAL. <https://www.awm.gov.au/napier-waller-art-prize-hub/2022-napier-waller-art-prize/banksia>（2024.1.20参照）
- (12) Australian Government. “Army” Australian Government defence, <https://www.army.gov.au/about-us/history-and-research/traditions/red-poppy>（2023.10.20参照）
- (13) 英国の退役軍人によって構成された組織。
- (14) 引用の原文：In England in 1919, the British Legion sought an emblem that would honor the dead and help the living. The red poppy was adopted as that emblem and has been accepted as the emblem of remembrance. The red poppy has special significance for Australians as they were among the first to flower in the devastated battlefields of northern France and Belgium in the First World War. In soldiers’ folklore, the vivid red of the poppy came from the blood of their comrades soaking the ground.
- (15) アンザックデーは、1915年4月25日の第一次世界大戦中に、アンザック軍が当時オスマン帝国（現トルコのガリポリ半島）へ上陸した日であり、8ヶ月続いた戦いで1万人以上の人々が命を落とした。毎年4月25日を国家に奉仕した全ての国民に思いを馳せる日と定め、第一次世界大戦のガリポリの戦いで戦ったオーストラリア・ニュージーランド軍団の兵たちと、当時国の為に尽力した人々のために追悼する。
- (16) 1918年11月11日の第一次世界大戦終結を記念して定められた戦争追悼日。
- (17) ジョン・マクレイ（1872～1918）はカナダの詩人、医師、作家、芸術家であり、第一次世界大戦では兵士として、ベルギーの第二次イーペルの戦いでは医師（外科医）として奉仕した。*In Flanders Fields*は、第二次イーペルの戦いで亡くなったマクレイの友人で元兵隊員のアレクシス・ヘルマー中尉が元となったといわれている。1918年に肺炎で亡くなる。
- (18) John McCrae, *In Flanders Fields*, Punch, 1915.12
- (19) 一般的にはtake upは戦いを再開するという意味で捉えられているが、津田博司「フランダースの赤いポピー」（藤原達史編『第一次世界大戦を 考える』（共和国、2016）所収）ではtake up with (to being to be friendly with somebody, especially somebody with a bad reputation (oxford)) の意で訳されている。本論では赤いケシの象徴性の由来について論じているため、一般的に普及している解釈を採択し、その点においての論述は割愛する。
- (20) AUSTRALIAN WAR MEMORIAL. <https://www.awm.gov.au/commemoration/customs-and-ceremony/rosemary>, (2023.10.20参照)
- (21) 第一次世界大戦で亡くなった方の家族を支援する団体名。
- (22) 原文：Since ancient times this aromatic herb has been believed to have properties

to improve the memory. Perhaps because of this, rosemary became an emblem of both fidelity and remembrance in literature and folklore. Traditionally, sprigs of rosemary are worn on Anzac Day and sometimes on Remembrance Day, and are usually handed out by Legacy and the RSL. Rosemary has particular significance for Australians, as it is found growing wild on the Gallipoli peninsula.

- (23) A.W.ハットフィールド著、山中雅也、山形悦子訳『ハーブのたのしみ』八坂書房、1993

〔依拠した新川和江の作品のテキスト〕

『青山語文』第55号、青山学院大学日本文学会、2025参照

〔主要参考文献〕

『青山語文』第55号、青山学院大学日本文学会、2025参照

Mona Baker, *In Other Words-a coursebook on translation*, Routledge, 1992

Peter Newmark *A Textbook of Translation*, Pearson Japan, 1988

Susan Bassnett, *Translation Studies*, Routledge : 4th edition, 2013

Venuti, Lawrence, ed., *The Translation Studies Reader*, London : Routledge. 2000 (1st ed.), 2021 (4th ed.)

〔写真の出典〕

「PhotoAC」

(ふじもと・まどか／本学大学院博士前期課程)